

<図書紹介> 『時と我：道元とデカルトの哲学』 (側瀬登 著 北樹出版 二〇一六年)

SUGASAWA, Tatsubumi / 菅沢, 龍文

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

70

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2018-03-20

【図書紹介】

『時と我 道元とデカルトの哲学』

(側瀬 登著 北樹出版 二〇一六年)

菅沢 龍文

本書は表題が示すように、第I部で道元の時間論を、第II部でデカルトの自我論を論じている。

第I部は六章から成る。第一章「道元と波多野精一における時間構造」では、時間を喩えて言えば「串団子」(または数珠)とされ、第二章「道元の『正法眼蔵』現成公案冒頭における解釈の比較考察」では、従来の読み方を検討しつつ、「現成公案」は「仏門初心者」向けに「修行」の困難性を示している、と新しい読み方をされ、第三章「道元の『現在』構造における唯識的解明」では、道元の「現在」である「而今」を「ばね座がね」に喩えられ、第四章「道元の『而今』と華嚴の『隔法異成』」では、道元の「而今」の背後には華嚴の「現在する永遠」という思想があるとされる。第五章「道元の言葉『前後ありといへども、前後際断せり』と「即非の論理」」では、この道元の言葉は鈴木大拙の「即非の論理」や『金剛般若経』の「空性」から解せるとされる。第六章「四摂事」の倫理的性格」では、「布施」「愛語」「利行」「同時」という「四摂事」について、

「四無量心」と対応させて、道元の理解を示し、「四摂事」の倫理的性格を「今日」の倫理として示される。

第II部は二〇一四年脱稿の三章からなる未発表論文で、第一章「コギトの自性」、第二章「コギトは必然で確実か」、第三章「コギトの無自性」という構成である。執筆動機はデカルト哲学の「不気味さ」と「根拠の不明瞭」であるという。内容はデカルト批判であり、ニーチェ、フッサール、ハイデッガー、ヤスパースなどによる批判を参照しつつ、最後に仏教思想に依りつつ「われ思ふ」の疑うは疑わず、と無自性であることを明らかにした(二三四頁)。

そもそも著者は、学生時代に佐藤信衛先生の大学院ゼミでデカルトの『省察』を読んだとのことで、このたび「学部・院生時代のテキスト・ノートを再検討し、講義プリント、ノートを再考し、過去二〇歳からの長年にわたるもの想起を度度にした」(同上頁)。その想起は多岐にわたっており、大学院時代は「七〇年安保闘争の最中」で、「学生運動も盛ん」で、「学内も混乱」していたということであるから、ほぼ半世紀来の思索を背景にしているだけあって、著者の多様な閃きに満ちた論述には目を見張る。

道元の思想に関して古くは学生時代に知った山崎正一先生のことを思い出され、またここ二十年あまりの比較思想学会での「仏教研鑽の賜物」が本書であるとのことである。